

「陽だまりハウスでマラソンを」

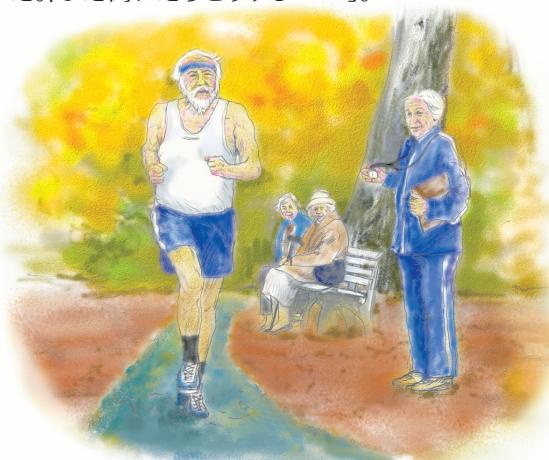
(15年、キリアン・リートホーフ監督)

「ベルリンマラソンまであと8週。だから毎日走るんだ!」

激越型うつ病を高齢者施設の仲間に支えられ、42.195kmを完走した“伝説のランナー”

映画・健康エッセイスト 小守 ケイ

「今月3度目よ。いつも私が来られる訳じゃないわ」。70代半ばのパウル・アヴァホフはメルボルン五輪(1956年)マラソンのドイツ代表で金メダリスト。今も元気に庭仕事に励む日々だが、乳癌を患った妻マーゴは、小康状態ながら時に不調で今日も台所で倒れ、多忙な一人娘が駆け付けた。「また倒れたらどうするの…」。



「終の棲家? 死ぬまで歌や工作か…」

意を決して高齢者施設に入居した夫婦。しかしパウルは、お仕任せの日課に耐えられず、庭を走り始める。「あの男、マラソンに出るんだって!」。入居者達の嘲笑の中、一人の



老人が旧い新聞切り抜きから「パウルだ!」。翌日、皆に記事を回すと、「私達の時代のヒーローね!」。

「マーゴ、協力を」。施設長の“庭を走るのは規則違反”もどこ吹く風のパウル。

仕方なく妻も、薬を飲み杖を使いつつ、昔と同様に笛やストップウォッチを手に一緒に練習へ。すると、日課をサボって応援する入居者も現れる一方、静かに暮らしたい隣室の“老紳士”は「迷惑だッ!」。反発したパウルは若い男性介護士、トビアスとの“庭15周走勝負”に挑み、ゴール直前のトビアスの急な腹痛でパウルの勝利に! 大喜びの応援シニア、夜はワインで盛り上がる。

「拘束より、走らせて心を慰めよう」

「毎日走るのは激越型うつ病の症状」。施設長が手配した神経科検査。療法士の憐みの目に傷つけた彼は、即、妻と施設を出て娘のマンションへ。「レースまで置いてくれ」。しかし、選手登録も済んだ頃、妻が乳癌転移の脳腫瘍で倒れて逝く…。「パウル、走り続けてね、約束よ」。

「同居、もう無理よ」。葬儀後、娘がキレると、彼は街を彷徨い、保護され施設へ。「マーゴ! どこだッ!」。深夜、壁を叩いて泣き叫ぶ。鎮静剤、ベッドに拘束。そこへ現れた隣室の“老紳士”、「拘束はイカンよ」。トビアスと共に密かに拘束を外し、庭に連れ出す。ヨタヨタ走り始めたパウル、徐々に自分を取り戻していく…。そして翌朝の礼拝、“老紳士”は胸を張った。「パウルはマラソンへ。さあ応援に行こう!」。

■ 映画の見所 ■

「パウル! パウル!」。競技場の大喝采。苦しくも妻の笑顔を糧に誇り高く走り抜いた男! スタンドに陣取るシニアや娘達も大きく拳を突き上げた…。

“老い”を温かに映す秀作。シニアは勿論、介護と仕事や恋愛との板挟みに苦しむ娘の姿を通して、多世代に身近な高齢化社会の現実を問う。パウル役のハラーフォルデンが実際のベルリンマラソンを走り、迫力満点!



「陽だまりハウスでマラソンを」
DVD発売中
価格: 3,900円(税抜)
発売元: 「陽だまりハウスパートナーズ」
販売元: ハピネット

©2013 Neue Schonhauser Filmproduktion,
Universum Film, ARRI Film & TV

「激越型うつ病を救った老人達の共感性エンパシー」

【監修】公益財団法人結核予防会 理事
総合健診推進センター 所長 宮崎 滋

エンパシーとは他者に感情移入し、共感、共鳴することで、思いやりや同情を意味するシンパシーとは異なる。入居者の老人達は、当初、年齢不相応に毎日運動するパウルを冷やかに見ていたが、オリンピックの優勝者と同時代を生きた記憶が徐々に蘇り、心を動かされエンパシーが湧きあがる。

しかし、過激な運動は激越型うつ病の症状の可能性がある。激越型うつ病では悲哀や抑うつが見られず、逆に強い不安や焦躁感、興奮などを呈し、自殺念慮を伴う事もある。配偶者の死や環境の大きな変化等は発症の要因となる。治療は精神療法と薬物療法だが、休養がとれないと回復に長期間を要する事もある。

妻の死後に強まった彼の不安や不穏は、批判的だった入居者の共感性エンパシーにより緩和された。共感が現実の行動を促して、老人達に癒しと安らぎを与えたといえる。